OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	雅号芭蕉考 ： 西行歌との関連
Author(s)	大坪, 利絹
Citation	語文. 1985, 45, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

雅号芭蕉考

―西行歌との関連―

大坪利絹

一

松尾芭蕉が「芭蕉・はせを」と称したり、称されたりしたのは何時からで如何なる理由ありし故か。何分私は俳文学の門外漢であり芭蕉学にしても大阪俳文学研究会の月例会を傍聴させていただくだけの耳学問がせいぜいの所だから、無知もよい所だが、恥を承知の上で言えば、菊山当年男氏『はせを』に「芭蕉の名と号」、萩原蘿月氏『芭蕉の全貌』に「芭蕉庵といふ号に就いて」・「芭蕉改号説」、山崎藤吉氏『芭蕉全伝』中に一説、桜木俊晃氏『芭蕉事典』に「芭蕉の雅号」、沼波瓊音氏編『芭蕉全集』中の年表天和元年項、等々にこの問題に触れられているが、それらの書にはこれから私の述べる西行との関連については全く触れていない。念のため、中村俊定氏監修『芭蕉事典』、栗山理一氏監修『綜合芭蕉事典』、或いは国語国文学研究史大成や日本文学研究資料叢書の『芭蕉』等も大急ぎで当って関連論文の有無を調べてみたが見当らなかった。必ず先学の論があるべき問題かと思うので、浅学の私の知らぬ所に述べられているかも知れず、或は自明の事として省かれたのかも知れないが、一応以下に私の調査を記して、専門家の御教示を仰ぎたい。

二

芭蕉自身が自分の雅号に関して述べたとされる言説には、

(1) 問曰「先師を尊む論によりて、我不審有。蕉門の人の撰集を見るに、句の下に名を書するに、或ハ芭蕉と書集あり、或ハ翁と書有。雅兄の『さるミの』にハ芭蕉と有。此師を尊む事のおろそかなるに似たり。いかなる事に侍るや」。去来答曰、「是をばせをと書事ハ先師のをしへ也。又、翁と書する事ハ、其角先師を尊ミ初て書ス。然共聊私にせず。むかし其角我に語けるハ、『今度都に来たり。師の名の高き事を弥しり侍りぬ。同門の人師を尊ミて、翁といふのミにあらず、他門の人我にむかって翁〳〵と称ス。まして季吟、師の師也。其子の湖春を先として翁といへり。しかれば門人の憚るべき事にあらず。重而集を出さんに、翁と書べし』といへり。答て申けるハ、『尤の事也。今誹諧の集において翁とかゝせんに、天下の人芭蕉翁たる事をうたがハじ。雅兄是を初て同門の衆の手本となし給へ』と云。此故に其角が集に初て是を書。

又、ばせをと後に改むる事ハ、『猿蓑』撰集し侍る時、句下に翁とかく。先師曰『此比門下の集を見るに、多くハ我を翁とかゝせり。尤憚るべし』。去来が曰、『師の謙退においてハしかり。然れ共、弟子尊敬に至りてハ、翁とかゝせん事くるしからじ』。先師曰、『されば、門人なれバ、自分の家にをさめんにハ、ともかくも有べし。是を世にひろめ、人にさたせんにハ、却てあさまなるべし。人丸赤人の哥の聖と聞え侍るも、いづれの集にか其名を知ざる。重而必翁とかゝする事なかれ』と下知し給ふ。是によりて、『さるみの集』に改て、芭蕉と書し侍る也。別に師を尊む浅深有にあらず」。〔旅寝論〕

(2) 先師曰「俳名は穴勝熟字によらず。唯となへ清く調ひ、字形の風流なるを用ゆべし。短冊など書て、猶見る所あり。片名書侍るに、ことゞくしき字形は苦しかるべし。はせを、は仮名にて書ての自慢也」となり。〔去来抄〕

があるが、(1)では芭蕉を尊敬する門人が「翁」と称呼し、作者名として「翁」を用いたのであって、芭蕉自身はそういう称呼を謙退して「芭蕉」とすべきと下知した由が述べられ、(2)はさらに俳名一般に就いて、必ずしも熟語による要はなく、たとい漢字熟字を使うとしても字形の大仰なものを避けるべき事、唱えて清朗、書いて雅致句う形を良しとした旨が述べられており、「芭蕉・はせを」等の雅号が自論によく適い、心中密かに自負していた号であった事が判るのであるが、併しこの自論は彼の他の雅号にも適合する一般論でもあり、ただ「はせを」と仮名書にした場合に感ずる高雅な気品は、彼の斯様な細心の心遣いから生ずるものである事がよく汲みとれる言説に過ぎない。従って「芭蕉・はせを」の雅号を用いた理由の一端は判明するものの、それは字面と声調上の理由だけであり、なお「芭蕉・はせを」の雅号を使った積極的精神的理由を示す文言としては、弱い発言としか受取れないのであるから、他に付加すべきもう少し強い理由を考察する要があろうかと思う。

三

声調・字形の風流以外になお「芭蕉・はせを」の雅号を選んだ積極的精神的な理由を、矢張り彼の言説から探るとすれば、その手懸りは「芭蕉」なる字句を使用した句文に注目するのが捷径かと思うので、まず句から当ってみよう。

(3) ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉
(4) 芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉
(5) ばせを野分盥に雨を聞夜かな
(6) 幾霜に心ばせをの松かざり
(7) 発句なり（ありィ）芭蕉桃青宿の春
(8) 鶴鳴や其声（に）芭蕉やれぬべし
(9) 芭蕉葉を柱にかけん庵の月
(10) 此寺は庭一盃のばせを哉

発句としては右の八句が芭蕉真作と現在確実視されているようで、その作成年時と初出書名は、(3)天和元・続深川集（寛政三刊）、(4)同・武蔵曲（天和二刊）、(5)貞享元・三冊子（安永五刊）、(6)貞享三年其角歳旦牒、(7)貞享年中・はせを盥（享保九刊）、(8)元禄二・曽良書留（雪満呂気では曽良作とするも編者の杜撰という）、(9)元禄五・蕉翁文集（宝永六以前成）、(10)年次不詳・誹諧曽我（元禄十二序、芭蕉句集には元禄五詠）。この他、連句に

(11)　江戸を立日
芭蕉野分その句に草鞋かへよかし　李下
月ともみぢを酒の乞食　翁
(12)　宿まゐらせん西行ならば秋の暮　雷枝
芭蕉と答ふ風の破笠　芭蕉

があり、(11)は李下の句の方に「芭蕉」なる語があるのであるが、これは前記(4)(5)と深い関連のある事瞭然なる故に取上げておく。(12)の雷枝は伊勢山田の人。(12)は拙稿立論上見逃せぬ句。(11)(12)共に天理本の稿本野晒紀行（貞享二）にある。又、存疑・誤伝句に、

(13)　深川やばせをを影に富士が行
(14)　深川や根ごしの芭蕉雪がこひ
(15)　深川やばせをを富士に預け行

があるが、(13)は犬椿集（享保年間刊）に出て作成年月未詳の存疑句、(14)は一葉集（文政十刊）に出ているが、杉風の「春待や根越の芭蕉雪がこひ（元禄戊寅〈十一年〉歳旦牒）」の誤伝、(15)も句選拾遺（宝暦二刊）に出ているが、千里の「深川や芭蕉を富士に預行（甲子吟行〈貞享元年〉」の誤伝である。

これらの句で年代の最も早いのは天和元年作であり、初出書で刊行の最も古いのは武蔵曲（天和二刊）であり、芭蕉伝や年譜類（例、芭蕉全伝・定本芭蕉大成・岩波大系句集・同文庫書簡集・小学館芭蕉集・新潮集成文集等・その他殆んど）によれば、芭蕉なる雅号の初使用は武蔵曲からである事を指摘している。(3)の前書によれば、李下が芭蕉の株を桃青の住庵に贈り、(3)(4)が作成される頃にかけて芭蕉なる雅号を使い初めたが、それは天和元年春の頃以後で、板本では武蔵曲で、芭蕉翁桃青と共に芭蕉という作者名が使われた。武蔵曲に出た(4)は、禹柳編『伊勢紀行』にも採られたが、それには「是は深川庵中の吟にて、これより芭蕉の翁とは世にもてはやす事ニなりしと」いう付記があり（岩波文庫俳句集による）、又蝶夢の『芭蕉翁絵詞伝』にも「愚案、是より住庵をばせを庵とよび、芭蕉翁と呼べりとぞ、云々」と述べ、竹人の『蕉翁全伝』にも「これよりばせを庵とは呼ぶ事になりぬ」とあって、(4)句出来以降世人の方から芭蕉の翁と呼ぶようになったので、必ずしも芭蕉自身による自称ではないような記述となっている。竹人の全伝は宝暦十二年、禹行の紀行は安永三年、蝶夢の絵詞は芭蕉百回忌に義仲寺奉納のものであるから、芭蕉歿後約七十年から百年後、(4)句作成からでも八十年から百年後の所伝となり、庵そのものの称呼はともかくとして、芭蕉自身がその雅号を他人の呼ぶに任せて自号としたという点は、遽に信用し難いものがある。私はむしろ人も呼び我からも意識的に名乗り始めたと見たいのである。この見方は浪化上人も同じで、その遺稿と言われる『俳諧正語抄』に「浪化云。翁若き時より和歌をよくせり。季吟を師として武江の素堂を友として善し。一夜秋雨の蕭颯たる寝覚に、芭蕉野分して盥に雨をきく夜哉、と此句に庭中の芭蕉を拈却して我号には得たり」とある。なお成美の『随斎諧話』には、成美自身「案、此説信じがたし」と断った上ではあるが、次の如き話を載せている。「江州水口小坂町たばこ屋久右衛門、表号李風といふ人の許に、季吟の真蹟を蔵せり。即、季吟門人芥船といふ人より譲り得るものなりといふ。その文、『きのふ松尾桃青来りて予に改名をこふにいなみがたく、八雲鈔のはいかい歌にならふて、はせをと呼侍る事しかり。月はなのむかしをしのぶ芭蕉かな、とあり』と殊に親しき人の語れり。真偽いかなるにや、暫しるして後の

評をまつ。」と。成美は、この話を多分、宇橋の『栗本雑記』（東大酒竹）の

「　きのふ松尾うし桃青来りて改名を乞ふ
　にいなみがたく、八雲抄の俳諧歌に習
　うて、はせをとよび侍る事しかり。
　月花のむかしを忍ぶはせをかな
　　拾穂軒季吟
　　愚意　判

右ノ反古、季吟門芥舟伝来而、今江州水口小坂町煙草屋久右衛門、俳名梨風、所持ト云。案ニ、芥舟ハ翁ノ門成ベシ。兀峯が桃実集ノ序者也。」

とあるのに拠って書き留めたのであろうが、栗本雑記は文化十二刊、随斎諧話は文政十二刊であるから、芭蕉歿後約百二十年から三十五年も後である点、さきの竹人・禹柳・蝶夢の所伝と同じく信じ難く、又、季吟の江戸東下の年月から考えても成美の疑うのはもっともであるが、私のここで注意したいのは、芭蕉という雅号を八雲御抄の誹諧歌に習うて彼自身から称し始めた―とするのは行き過ぎとしても少なくとも季吟の命名が八雲御抄に関連するという点であって、これは少なくとも竹人・禹柳・蝶夢らが他人の称呼に任せて自然発生的に号したとする所伝と本質的に異なる見解であると思われるのである。

[註1]

四

ところが併し、八雲御抄巻一正義部の誹諧歌の項には、これに関連する記事は全く見当らない。ただ巻三枝葉部の草部に「芭蕉　風ふけばまづやぶるゝといふ」という一条があり、この注記を御抄は何に基づいてせられたかというに、これは『前大納言公任卿集』の歌に基づくのであって、この公任歌は後拾遺集にも採られてあり、詞書もその方が詳しいので、今それを挙げると、

　維摩経の十喩のなかに、この身芭蕉の如し、といふ心を
　　前大納言公任

　風ふけば先破れぬる草の葉によそふるからに袖ぞ露けき

という歌の事である。詞書の「十喩のなか」とは、維摩経方便品の十喩の第四喩「是身如芭蕉、中無有堅」を指すのである。公任と芭蕉との関連は、私はまだ十分調査していないので、『田舎の句合』第十四番の評語に「公任卿、歌の舟に乗て、秀歌よみ玉ふよし。云々」とある公任の三船の誉れに関するものぐらいしか思い出せないが、ただ歌の姿からはさきの(3)の「ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉」と似通う表現であるから、芭蕉も公任に相当の関心を抱いていた事は判るが、併し私は公任の歌よりも、この八雲御抄の記事からは西行の次の歌を、より強く想起すべきではないかと思う。これは私に限らぬ事と思われ、例えばこの八雲御抄の記事は後に『藻塩草』にも引用せられるが、そこには「庭のはせを。風吹はまつやふるとよめり。又、風ふけはあたにやふる共。又、秋風にあふはせを葉のくたけつゝあるにもあらぬ世とはしらすや（後略）」として出ていて、西行歌に関連ある事を示唆するのである。右の「秋風にあふはせを葉」の歌は、久安百首の前参議教長卿の歌で、題「無常」、「風ふけはあたにやふる」の方は実に西行の『山家集』に出ている歌であって、芭蕉の西行に対する私淑ぶりから考えて、これを無視する事は到底できぬと私は信ずるものである。その西行歌とは、

かせふけハあたにやれ行はせをハのあれハと身をもたのむへきかハ〔陽明文庫本〕

風吹はあたにやれ行はせうはのあれはとみをもたのむへきかは〔李花亭文庫本〕

で前者は六家集系の源流的最善本、後者は西行上人集・西行法師家集・異本山家集とも呼ばれるものの写本であるが、芭蕉の見たと思われるものは流布の六家集本系の板本であったろうから、その形を示せば、

風吹はあたになり行はせをはのあれはと身をも頼むへきよか〔山家和歌集〕

で、第二・第五句が異り、又、夫木抄なども見ていたかも知れぬが、それには、

風ふけはあたにやれ行はせを葉のあはれと身をもたのむへき世かと第四・第五句が異った形ででている。更に松屋本による書入れに従えば、

風吹はあたにかれ行はせをはなあれはと身をも頼むべきよか

という歌形になり第二・第三・第五句が異って、芭蕉の葉でなく花を詠じた内容になってしまっている。歌形は多少異っているが、芭蕉は自庵に芭蕉株を贈られてその葉が茂り出し、人々から芭蕉庵と呼ばれるようになった頃には、必ずこの歌を想起していたと思う。というのは、先に示した(12)の連句の雷枝句「西行ならば」に応じた彼の「芭蕉と答ふ風の破笠」の呼吸や、さらに以下に論ずる「芭蕉を移す詞」の内容とからである。この二つは天和元年から数年も後のものであるから、この二つからでは天和元年当時の芭蕉の気持は推量できぬと、もしするならば、それは人間の精神機構と成長発達というものを考慮しない考え方であって、俗諺「三つ子の魂百まで」を持ち出すまでもなく、芭蕉の西行に対する傾倒私淑は天和以前からのものであるから、そのような考え方は私の容認できぬ所である。既に寛文年間の「命こそ芋種よ」句、延宝四年の「命なりわづかの笠の下涼ミ」その他天和以前作のもので西行歌と関連あるものの指摘に事欠かぬからである。

五

ところで「芭蕉を移す詞」は、天和元年から十一年後の三度目の入庵の時の文であるが、天和元年に深川草庵に芭蕉株を植えた頃の西行に対する気持がはっきりと出ていると思われる。これには三種の異文が伝えられていて、文の長さに長短があり、文飾も異っているが、その書作年代は元禄五年八月とされており、三種は、初案・二案・三案かと思われるが今は立ち入らない。それら三種を比較すると、文飾や内容上、不変の部分と変化の部分とがあり、その不変の部分は、芭蕉の捨てるに忍び得ざる気持の含まれる部分と考え得るからその部分を引用してみよう。左のAは、三日月日記真蹟、Bは、蕉翁文集、Cは、芭蕉翁全伝に収載されたものである。

(16)の一

A人々の契りも昔にかハらず、猶このあたり得立さらで、旧き庵もやゝちかう、三間の茅屋つき〳〵しう、杉の柱いと清げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くしわたして、南にむかひ池にのぞみて水楼となす。地は冨士に対して、柴門景を追てなゝめなり。浙江の潮、三またの淀にたゝへて、月をみる便よろしければ、初月の夕より、雲をいとひ雨をくるしむ

B柱は杉風枳風が情を削り、住居は曽良岱水が物すきをわぶ。北に背て冬をふせぎ、南にむかひて納涼を助く。竹欄池に臨るは、月を愛料にやと、初月の夕より、夜毎に雨をいとひ雲をくるしむ

C今年辛未の夏（大坪注、元禄四年ノコト。元禄五年ハ壬申デ、年次齟齬シ、Cハ問題視サレテイル）、杉風一人の施主と成りて聊か枳風が志を相兼、住居は曽良岱水が物好に任せて、三間の茅屋池に臨て立り。南にむかひて納涼をたすけ、月光池に移り、畳をてらして、残夜水樓に四更の雲を吐き、やゝ薫風吹ける秋の初風も身に染みそめて、仲秋三日の夕より、雨を苦しみ雲をいとふ。

(16)の二

A名月のよそほひにとて、先ばせをゝ移ス。其葉七尺あまり、或ハ半吹折て鳳鳥尾をいたましめ、青扇破て風を悲しむ

B明月のよそほひにとて芭蕉五本を植て、其葉七尺余、凡琴をかくしぬべく、琵琶の袋にも縫つべし。風は鳳尾をうごかし、雨は青竜の耳をうがつ

C三五夜近う成行くまゝ、芭蕉を移して又芭蕉庵となす。其葉七尺あまり、凡琴を隠しぬべく、琵琶の袋に縫つべし。鳳凰尾を動かし、雨青竜の耳を穿

(16)の三

A僧懐素ハこれに筆をはしらしめ、張横渠は新葉をみて修学の力とせしとなり。予其二つをとらず、唯このかげに遊て、風雨に破れ安きを愛するのミ

B新葉日々に横渠先生の智を巻、上年上人の筆を待て開く。予はそのふたつをとらず。唯此かげにあそびて、風雨に破レ安からむ事を愛スのミ

芭蕉葉を柱にかけん庵の月

C新葉日々厚く、先生の智を巻、上年上人の筆を待てひらかむとす。我その芭蕉の役と成て、日々破るをかなしぶのみ。

右、ABCは全文の長さでは、Aが最長でBCと続き、文案推敲の順は、Cが初案、Bが再案、Aが成案らしき感がするが（岩波大系文集や阿部喜三男氏俳文集ではBCが初案、Aが成案歟と考えておられる）、前述の如く今は立入らぬ。ABC三種ともその冒頭部に変化の部分が多く、後になる程内容が共通してくるという特長を持つ。Aではその変化の部分に奥の細道行脚のことを記し、行脚中の芭蕉株の枯死をおそれて隣地へ移植し、西行の「こゝをまたわれ住みうくてうかれなば松はひとりにならんとすらん」の下句を引いて芭蕉株への愛惜の情を示す文飾もある。さて(16)の一では、三度目の芭蕉庵建立についての門人達の好意と、観月の為の雨雲を厭う情を示すだけで、本稿の主旨に援用すべきものとしては、寛文十二年の『貝おほひ』序に「釣月軒」と軒号して、月をこよなく愛した芭蕉の俤がここに糸を引くという事ぐらいしかないのであるが、西行もその家集『山家心中集』を「花月集ともいふべし」と称される程、月の歌人であった事は、思い合わしておいてよいだろう。(16)の二では、芭蕉葉の風雨に傷み易い事を述べ、彼の雅号の性格を裏側から暗にというか無意識にというか、説示しているようである。殊にAの「半吹折て鳳鳥尾をいたましめ、青扇破て風を悲しむ」、Bの「風は鳳尾をうごかし」は、彼の落款の印章「鳳尾」（Aでは更に「羽扇」も）の由縁を示し、ひいては風羅・不耐秋の印章もその由縁は「芭蕉」の印章と共に、すべてこの秋風に傷つき破れ易い事に由縁する命名であり、それは更に次の(16)の三に至ってより明白に示され

る。⑯の三では懐素（一名、少年上人。上年は宛字）が貧しくて、紙に習字ができず芭蕉葉で代用して名書家となった事、張横渠が芭蕉の新葉が次々と巻葉して伸びるが如く、自己の修学も斯くありたいと望んだ故事を踏まえながら、併し彼芭蕉は、斯くの如き実用・修養の資として芭蕉葉を把えず、風雨に傷み易き「無用」性――夏炉冬扇の無用が真の用たり得るという哲学――を愛する旨を記すのである。ただここで重要な事はＡＢＣ共に風雨に破れ易き事を愛する旨を強調して文を結んでいるにかかわらず、従来の諸註はこの部分をさきに引用した西行歌「風吹けばあだに破れ行く芭蕉葉のあればと身をも頼むべきかは」に深く関連づけて説明されていないのである。（例、阿部氏芭蕉俳文集・岩波大系文集・小学館松尾芭蕉集・新潮集成文集等々）。芭蕉の脳裡には⑶⑷の句が作られた当時からこの⑯の文が綵られるまで、おそらく彼が、芭蕉と号し風羅坊と号し鳳尾或いは羽扇・不耐秋と印章した時々に於て、この西行の述懐歌は脳裡から離れなかったのではないかと私は信ずるのであるが、笈の小文冒頭「かりに名付て風羅坊といふ。うすもののかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ」の箇所に於ても、この西行歌が諸註に無視されている事はまことに残念である。和歌に於ては、心と詞と姿と云うことが常に言われるが、詞に表出された場合のみならず、心や姿にまで及ぼして付註されれば、文学の精神的本質的内容にまで理解が届くと愚考するが如何なものであろうか。今の場合は詞も心も適っていると思われる。姿というのは⑶の句と前記後拾遺公任歌との関係の如きを私は言うのである。

六

「芭蕉」という雅号が西行歌に基づくものではなかろうかという事を以上述べ来ったが、元来この西行歌は単に歌としては勿論のこと、その上に一般庶民の人生観にまで普遍化されていたのではないかと私は考えている。という訳は、それは「身体は芭蕉の如し、風に従って破れ易し」という格言的なものになって民間に伝播されていたのであって、『天草版金句集』に「シンタイワ　バショウノゴトシ　カゼニ　シタガッテ　ヤブレヤスシ。心。ヒトノ　ミワバショウノ　カゼニ　ヤブルルガ　ゴトク　ヂャゾ」（原文ローマ字書き）とあるのによっても明らかで、西行を敬慕した芭蕉が、西行歌やこの金句に思い到らなかったとは到底考えられないのである。なお「不耐秋」と「芭蕉」との関連につき付言すると、岡田利兵衛先生は『図説芭蕉』に『我峰文集巻百十二』の「和勿斎芭蕉不耐秋楽府」を引いて出典とされるが、『我峰文集』が私には未詳で、或いは『鵞峰全集』[注2]（元禄二年刊）の中の「文集百十二巻」の中の一冊か、或は類似名の『海峰文集』か、いずれにしても未見である。併し私は、これよりももっと芭蕉にとって親しみのあった『三体詩巻一』の「訪隠者不遇」詩が出典ではないかと思う。三体詩に基づく彼の作品の多いことは、例えば中村俊定氏監修『芭蕉事典』にも掲挙するが（但し、不耐秋との関連は指摘していない）、この三体詩は元和八年に既に素隠の『三体詩抄』として刊行され、

籬外涓涓水流　槿華半照夕陽収
欲題名字知相訪　又恐芭蕉不耐秋

という[注3]窶鞏の七言絶句を収載する。この詩転結の素隠の抄に「ノコ

リ多サニ、立チ休ラッテ、首ヲ回ラシテ見タレバ、カシコニ芭蕉ガアルゾ、サラバ所詮芭蕉ニ吾ガ名字ヲカイテ、コレマデ来リ訪フタヲ知ラシメバヤト思フタガ、待テシバシ、ワレ思フニ、芭蕉ハモロキモノナレバ、風ガ一フキ吹イタナラバ、芭蕉ハ破レテ、ウセヌベキゾ、サラバトテ、題セザル処ニ、不尽ノ意ガアルゾ」とあって、正に西行歌と一脈相通ずる部分があるのである。なお贅言すれば、先に引用した『藻塩草』にも「無耳聞雪と云り。蕉心不展待時雨芭蕉不耐秋」とあるが、「蕉心不展待時雨」は『蘇東坡詩集巻四十八』の「題浄因壁」という七言絶句の転句であり（大坪注、この絶句は殆んど同文で『黄山谷詩集巻十一』にも採録されてあり、作者をいずれとするかについては未考）、「芭蕉不耐秋」は上述三体詩の結句である。私が『我峰文集』よりもこの方が芭蕉の目に触れやすかったのではないかとする所以である。

七

最後に仮名署名「はせを」なる字面と、芭蕉を詠みこんだ和歌について一言触れておきたい。「芭蕉」は正しい仮名遣いは「はせう」であること、南信一氏が「厳密にいえば、はせう、と書くのが正しい」（総釈去来の俳論下）と言われる通りである。それを芭蕉があえて「はせを」とした理由としては、尾形仂氏の、「芭蕉」に「破蕉」の意も利かし、その上その両方に通ずる「となへ」も利かす為に仮名書にしたとされる考察（座の文字）も傾聴に値するが、それならば「はせう」でもよい筈であるから、私は矢張り和歌における表記の、伝統というか通行というか、それを踏まえた表記なりとの平凡な考え方をせざるを得ない。『夫木和歌抄巻二十八』の「芭蕉」には、既述の教長の久安百首歌や西行歌以外に、

きり〳〵すまちかきかへにおとつれてよひの雨ふる庭のはせを葉
（正治二年百首、寂蓮法師）

いかゝするやかてかれ行はせをはにこゝろしてふく秋風もなし
（百首歌草廿首中、民部卿為家）

を載せるが、これらはそれぞれの原の集でも仮名書は「はせを」であり、何故に「はせう」とせぬかと言えば、矢張り和歌の伝統故にと答えるより仕方がない。即ち、古今集巻十物名の、「きのめのと」の歌に、

ささ、まつ、ひわ、はせをは
いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ

があり、「こゝろばせ（意気・景迹・心操・操・神合・景行・遐迹）をば」に「芭蕉葉」をかくし、又『信明集』に、

長谷寺やけたりときくころ
世の中のたのみ所にせしものをはせをばかくややかむとおもひし

があり、「長谷をば斯くや」に「芭蕉葉」を詠みこんであって、これ以後仮名書は「はせう」とせず「はせを」が踏襲されるのである。こういう伝統を勿論芭蕉が熟知していた事は想像に難くなく、さればこそこの古今物名歌を下敷にした(6)の句も生じたのであって、(6)に古今物名歌の影響を認める二柳庵三四坊の説（『松箇集』）に賛成せられぬ顕原退蔵博士のお考え（芭蕉俳句新講上）は、(6)句の「心ばせをの松」と物名歌の「時まつまに・心ばせをば」の関連に強いて目をつぶられたものとしか私には思われないのである。なお蛇足ながら、板行は元禄八年ながら、契沖の『和字正濫鈔（巻三、中下のを）』に、

芭蕉　ばせをば　和名抄古今物名。又信明集にも物名によめり、芭蕉の二字の音に、芭蕉は葉をいふ草なれば、さて、は、の字をそへたるなり

と述べ、翌元禄九年の橘成員著『倭字通例集』にも

ばせを、芭蕉、本名甘蕉。バセヲハ訓ニアラズ声ノ変也。バセヲバセウ相通ズ。古ハばせをバト云、古今物ノ名ニ心ばせをハ人にみえつゝ

とあるのは、「芭蕉」を音読した時の仮名表記とその由来を述べたもので、敍上の私の説明が、芭蕉の活躍した時代の略々文人の常識であった事を示し、これを字書に定着させたものと考え得るのである。

又、謡曲の『芭蕉・葵上・井筒・竹雪』等にも「芭蕉」なる語が見られるが、そこには「はせう」「はせを」の両様の表記がなされてあり、これは『倭字通例集』に云う「相通ズ」る故である。併し古態は「はせを」とみるべきであろう。「芭蕉」の場合はともかくとしても、少なくとも「芭蕉葉」の場合は「はせをは」が伝統的表記であったと思うのである。雅号「芭蕉」もかくして「はせを」と書かれたにちがいなかろうと私は想像する次第である。

結局、さきの『栗本雑記』や『随斎諧話』の所伝は、芭蕉という雅号に就き、その「はせを」なる仮名書は古今誹諧歌（実は物名歌）に基づくものであり、その芭蕉葉のやぶれ易さと人生無常の連想は八雲御抄に記述があるというような内容を、芭蕉自身が門人か誰かに語ったのを、これは和歌に関連する話柄であるから、芭蕉の和歌の師の季吟と結びつけられて、やがてこのような所伝となり、まことしやかな文書までが作成されるに到ったものではなかろうか。とすればこの所伝にもなにがしかの真実に迫る要素は含まれていたのである。

以上、拙稿を結論すれば、芭蕉なる雅号は、彼自身、李下より芭蕉株を贈られた元和元年春以後、(3)(4)の句が作られた頃にかけて、西行歌に基づき自称した雅号であり、その仮名書も和歌の伝統に従って書くようになったのであろうということを論じた次第である。

註1　元禄二年十二月二十一日、湖春と共に召出され医員に準じ季吟二百俵、湖春二十口の給。（常憲院実記・巻二十二）

註2　鵞峰は林羅山第三子、春斎とも号し、山口素堂二十歳の頃（寛文の初め）の漢学の師であった。

註3　トウキョウ。唐の人。字は友封。性温和にして、士友言議の時も口吻を動かすのみで語を発せず、仍りて囁嚅翁の名があった。

追考

一　(7)は「発句なり松尾桃青宿の春」とし延宝七年作、知足写江戸衆歳旦に見える（森川昭氏「延宝七己未名古屋歳旦板行之写シ」俳文芸二号）。然すれば雅号芭蕉はこの時点では未称で、以後雅号芭蕉を自称自覚してこの旧作を「芭蕉桃青」と改案したと考え得る。

二　「芭蕉を移す詞」のAが、BCよりも推敲を経た成案とすれば、BCに無かった西行歌「こゝをまた」の下句を付加した事になり、文末の「風雨に破れ安きを愛するのミ」という西行歌依拠の文飾と一層緊密な照応を持つ事になろう。

三　この論稿を昭和五十九年十月廿一日の大阪俳文学研究会で発表、その席で金光洋三氏より、檀上正孝氏に「芭蕉仮名落款考」のある事の御教示を得た。檀上氏論文は、主旨は「はせを」表記の史的考察にあり、使用された資料は拙稿と重複するものも多いが、拙稿の主旨は雅号芭蕉は西行歌に由来するものであろうと言うに重点があり、檀上氏の主旨は「はせを」という仮名表記がわが古典の伝統的表記の襲用である旨を論ぜられたもので、必ずしも西行歌との関連を論ぜられたものではなかっ

たので、拙稿を発表することにしたのである。

四　その他、浅野信氏に「〈芭蕉〉という号をめぐって」（『俳諧の語意と文法』所収）、仁枝忠氏「芭蕉俳号考」（『芭蕉に影響した漢詩文』所収）もあるが、西行歌との関連を論じたものでなく、拙稿と主旨に於て変るので発表に踏みきらしていただく次第である。

—親和女子大学教授—

含翠堂（土橋）文庫目録—続—

先に昭和四十六年に国史研究室編に成る目録が刊行されているが、本目録はそれに続き、土橋家旧蔵の文芸関係資料を収録する。早く昭和二十九年より、本誌の第十二・十三・十五号の三輯にわたって紹介され、とくに主要連歌作品と土橋友直の歌学の師河瀬菅雄の著作を中心に解説が施されていて、ひろく知られていたものであるが、ここにようやく整理が完了し、目録作成にこぎつけ、その全容を知ることができるようになった。

全五三ページ。総点数四六七。連歌がそのうち二三六点でもっとも多いが、河瀬菅雄著『古今見聞抄』（巻三十七から巻四十まで欠）、『百人一首左称葛』、阿知子顕成編の俳書『てくり舟』（巻三～六）などの稀覯書もあり、宝暦九年写の鷺流狂言が数点見えることも注目を引こう。

本目録は非売品であるが、国文学研究室に少々残部があるので希望者は左記に申し込まれたい。なお、郵送料および雑費として、一冊につき四百円をお願いしたいが、送金は現品到着後、なるべく郵便振替にてお願いしたい。

〒560　豊中市待兼山一の一　大阪大学文学部国文学研究室
（振替番号）大阪3—43320